

2 千年前の大集落「か も い せ き加茂遺跡」



加茂遺跡全景（平成4年北側より撮影）

加茂遺跡は、川西市南部の加茂1丁目、南花屋敷2・3丁目に広がる旧石器時代から奈良・平安時代にかけての遺跡です。標高約40メートルの伊丹台地突端部にあたり、東・北側は落差約20メートルの崖となっています。発見は大正4年(1915)で、多くの石器や弥生土器が出土することで有名になり、昭和11年(1936)には採集資料を展示した宮川石器館が開館したことから、多くの研究者や郷土史家が訪れました。

遺跡が最も栄えたのは、およそ2千年前の弥生時代中期で、近畿地方を代表する約20ヘクタールもの大集落に発展しました。これまで行った300近い発掘調査では、防御のために環濠(かんごう)で囲んだ中心居住区や環濠外居住区、墓地などの構造が明らかになっており、最盛期にはおよそ500人もの人々が暮らしていたと考えられます。また、ムラ長の住居と推定される中心部の大型建物や、中心居住区に入るための唯一の環濠入り口、防御をさらに高めるための崖斜面の環濠など全国的にもまれな遺構も見つかっており、遺跡の価値を高めています。

現在集落中心部約3.2ヘクタールが国の史跡に指定され、今後の整備・活用が期待されます。出土遺物は、遺跡内の川西市文化財資料館(南花屋敷2丁目13-10、月曜日・年末年始休館)で見学することができます。